

第2章 西東京市の歴史文化の特徴

1 自然環境・地理的特徴

本市は、武蔵野台地のほぼ中央に位置します。市内の標高は約 47～67mであり、起伏の少ない平坦な地形です。

武蔵野台地の形成は、およそ7～8万年前にさかのぼるといわれ、多摩川や入間川が運んできた奥多摩の山地の礫が堆積してできた広大な扇状地です。

その後、箱根火山・古富士火山の噴火による火山灰が飛来、堆積して台地が形成されました。これが関東ローム層といわれる赤土で、これを基盤にその上に黒ボク土と呼ばれる腐葉土層が堆積し、本市の地表面を構成しています。

標高 58～60m付近は地形面の変化に富み、湧水のわきやすい地点が多く存在します。これらの水が源流、あるいは源流の一部をなし、市域には石神井川と白子川と新川の3本の川が流れていますが、現在、白子川はほぼ全域が暗きよになっています。

また、市域には、「ちゆうすい宙水」と呼ばれる地下水堆すいたいが多く存在しており、かつては、この地下水堆の影響で、大雨の後などに川筋や沼状の水場がみられる場所が多くありました。谷戸地域では、それらが白子川の源流地のひとつとなっていました。また、その川筋は、「下保谷のシマツポ」（白子川）「上保谷のシマツポ」（新川）とも呼ばれました。

こうした川の流れや浅い地下水の存在が、旧石器、縄文時代の人々の活動や初期集落の形成に大きな影響を与えています。



武蔵野台地の中の西東京市の位置



東京都の中の西東京市の位置

2 社会的・歴史的特徴

(1) 最初の一步と集落のはじまり

～旧石器時代・縄文時代の人々の活動と集落の展開～

市域北部の白子川、中央部の新川（旧・白子川）、南部の石神井川の流域には、旧石器時代から縄文時代の遺跡が13遺跡確認されています。現在市域で発見されている最古の遺物は、約4万年前の後期旧石器時代初頭にさかのぼります。

その後、縄文時代に入り、石神井川流域南岸の下野谷一帯に集落が営まれ、特に今から4～5千年前の縄文時代中期には、石神井川流域の拠点となる大規模な環状集落が複数つくられました。これが下野谷遺跡で、南関東でも屈指の規模を持つ縄文遺跡として国史跡に指定されています。

(2) 荒涼たる武蔵野の原野

～弥生時代以降、中世初期までの風景～

縄文時代後期になると、盛況を誇った下野谷遺跡からほとんど遺物が発見されなくなります。これは、気候変動と生業形態を含む社会変化が原因とされており、石神井川や白子川の水量や水質も変化し、人々はより稲作農耕に適した地域へ移っていきます。

その後、弥生時代から平安時代後期（中世初期）にかけて、人々が定着した跡がほとんど見つかっていません。この様相は、国分寺や府中といった^{かんが}官衙が置かれた地域以外は、現在の武蔵野台地の中央部ではほぼ変わりません。古い短歌等に描かれている風景は、^{あしほら}葦原や^{かんぼく}灌木が生い茂る、開発と定住をこぼむ荒涼とした山林原野です。

(3) 定住化への動き

～鎌倉時代以降、初期定住集落の成立～

鎌倉時代に入ると、武蔵野台地にも様々な武士団が形成され、鎌倉へ通じる街道として鎌倉街道がつけられました。

市域でも大きな武士団のいた八王子とを結ぶ横山道がつけられました。この横山道が通る谷戸地域では、「^{えんぎょう}延慶（1308年～10年）の^{いたび}板碑」をはじめ、いくつもの板碑が発見されています。この地域は前述の宙水地帯にあたり、浅井戸を掘ることができる地域です。

下保谷の荒屋敷周辺も同様の条件を持つ地域であり、14世紀初頭の板碑が数多く発見されています。しかし、この地域で発見される板碑は全てが日蓮宗に関わる文字板碑であり、市内の他の地域とは異なる信仰、文化を有していたことがわかります。

さらに、石神井川北岸の^{しもやぎさわ}下柳沢遺跡からは、嘉暦3年（1328年）の記銘のある板碑のほか、中世のお墓と考えられている^{ちかしきこう}地下式壙がまとまって発見されています。

このように、市域では室町時代頃までには、水の比較的豊かな土地に、散在型の初期集落が形成されました。集落には、鎮守等の社が構えられ、現在につづく社寺や民間信

仰の講等を中心に地域ごとの歴史文化を育んでいきました。

なお、「田無」「保谷」が史料に初めて現れるのは北条氏康（1515年～1571年）の代に作成された「小田原衆所領役帳」です。1536年（天文5年）の検地についての記載には「廿七貫五百文 江戸 田無南沢」、「九拾八貫八百拾文 小樽保屋」とあり、後北条氏に従属する江戸衆家臣による支配下に組み入れられていたことがわかります。

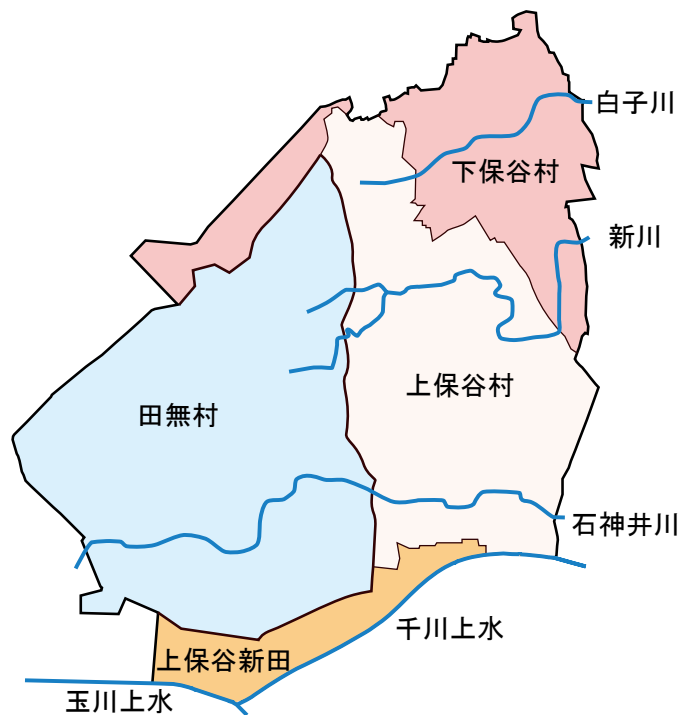
（4）西東京市の原型

～江戸時代における宿場田無と農村集落の形成～

徳川家康は江戸に入府することが決まると、まず初めに、江戸との交通網である街道と上下水道の整備を命じます。1606年（慶長11年）に青梅街道が開通すると、青梅から江戸への中継地点であった箱根ヶ崎と中野のほぼ中央にあたる田無に、当時の移動手段であった馬の乗り換え（継馬）等のため、谷戸地域から人々に移住させられ、田無宿が置かれました。近世村落としての田無村の登場です。青梅街道は武蔵野諸村と江戸方面を結ぶ大動脈として重要な役割を果たし、舟運や、明治に入ってからの鉄道輸送によって代わられるまで田無村発展の大きな原動力となりました。

また、市域の南部境界には1653年（承応2年）に開削された玉川上水と1696年（元禄9年）に玉川上水から分水された千川上水が流れています。

しかし、田無宿は水が乏しい場所で、大きな苦勞を余儀なくされており、1700年頃ようやく、玉川上水から田無用水の分水が許され、その後は水車による製粉等も盛んになり、街場、農村の両輪で経済も発展し、代々の名主下田半兵衛（富永・富宅・富潤・富栄ら）を中心に文化、福祉等に優れた村づくりが行われました。



江戸時代後期の旧村図

一方、田無宿以外の地域は、江戸の近郊農村として畑作農業を中心とした集落形成が進みました。旧保谷市域には、中世の初期集落からそれぞれ発展した上保谷村、下保谷村ができ、下保谷村は日蓮宗の信仰にもとづいた独自の文化を発展させました。また、上保谷村域でも、柳沢等石神井川の周辺域では榛名山信仰が広まる等、地域ごとに特徴ある歴史文化が育まれていきました。

強風や土ぼこりをよけるため、また薪炭^{しんたん}の原料とするため等により、屋敷周りには屋敷林が形成されるほか、江戸幕府の命により、江戸で使われる薪炭、建築材料を得るために木々が植樹され、武蔵野の風景としてなじみ深い、雑木林と農地の景観が形成されました。

八代将軍徳川吉宗の時代には新田開発も促進され、市域の東部や南部には新田がつけられ、上保谷新田が新しい村として成立しました。

そのような中、田無村は周辺地域の中心的な役割を担っていきました。特に、江戸時代の末期にはその役割が強まり、名主である下田半兵衛は、周辺の41か村で編成する田無組合村^{そうだい}の惣代を務めることになりました。

(5) 近代都市の建設

～様々な苦難を経て、近代都市として力強く再出発～

幕末や明治維新当初には、近代化へ向かう様々な混乱が市域にも波及しており、幕府に対する租税の意見の申し立てを行い、民権運動の先駆けと称されることもある「御門訴事件^{ごもんそ}」等がそれにあたります。また、明治政府の行った神仏分離政策による神社の合祀等に伴う混乱もありました。

明治時代以降、田無村は地域の中心として成長し、商店や旅籠^{はたご}、飲食店等が引き続き発展し、1889年（明治22年）には町制を施行しました。しかし、1889年（明治22年）の新宿・八王子間、1895年（明治28年）の国分寺・川越間の鉄道の開道によって、田無経済は大きな打撃を受け、田無は北多摩北部の中心地としての位置を失っていきました。

本市域では1915年（大正4年）に武蔵野鉄道の保谷駅、1924年（大正13年）には田無町駅（現在のひばりヶ丘駅）が開設されました。さらに1927年（昭和2年）には西武鉄道の保谷駅（現在の東伏見駅）、西武柳沢駅、田無駅が開設されました。

鉄道の敷設とともに、沿線開発が行われ、住宅街が開発されたほか、1929年（昭和4年）には東伏見稲荷神社が京都の伏見稲荷大社から分祀されました。また、渋沢敬三が中心となり地元の在野の民俗学者高橋文太郎とともに、日本初の野外博物館である「民族学博物館」（現在の国立民族学博物館の前身）が保谷に計画され、1937年（昭和12年）に建設されています。その後長く、保谷は「民族学の拠点」と呼ばれるようになりました。また、1930年（昭和5年）に隣接する久留米村（現・東久留米市）に移転してきた自由学園の販売した住宅地の一部が市域にもあり、近代建築の巨匠の一人であるフランク・ロイド・ライトに学んだ遠藤新^{えんどうあらた}が設計した近代和風建築が残っています。

第二次世界大戦前には、多摩地域には大きな軍需工場も多数建設されました。隣接する武蔵野市へ1938年（昭和13年）に進出した中島飛行機武蔵野製作所の建設に先立ち、1928年（昭和3年）に田無町北部に中島飛行機発動機試運転工場が建設されました。1938年（昭和13年）には、その南に隣接して中島飛行機田無鑄鍛工場（翌年、中島航空金属と改称）が建てられ、こうした大工場への空爆は激しく、田無、保谷にも大きな人的被害がありました。

戦後の復興はめざましく、首都東京のベッドタウンとしてひばりが丘団地等大規模な宅地開発が行われ、さらに住宅地やマンションが急増し、人口が飛躍的に増加しました。

その中で、1953年（昭和28年）に制定された町村合併促進法に基づく昭和の大合併の動きに伴い、田無町と保谷町でも周辺町村も含めた合併市制を模索する時期が続きました。1965年（昭和40年）9月に保谷町田無町二町合併協議会を設置し、合併市制移行を目指して協議が開始されましたが、話し合いの調整がつかず、1967年（昭和42年）1月1日に、それぞれ市制を施行しました。その後、1995年（平成7年）の合併特例法による平成の大合併の動きを受けて、合併の検討が持ち上がり、1999年（平成11年）10月に設置された田無市・保谷市合併協議会を経て、2001年（平成13年）1月、両市が合併して西東京市が誕生しました。

このように、宿場町の繁栄を引き継いだ田無市と新田開発を含む首都近郊農村から発展した保谷市は、各々独自の歴史文化を育んできました。また、信仰や集落の発展の時期の違いを見ると田無村、上保谷村、下保谷村、上保谷新田の旧村等で、それぞれ特徴的な歴史文化が息づいています。このような多様性は、大きな特色の一つであり、現在、それぞれの地域の個性が寄り添いながら、また、アニメーション文化の振興やランドマークとして愛されるスカイタワー西東京、多摩六都科学館の建設等、新たな文化の動きも取り込みながら、西東京市の歴史文化を形づくっています。



市指定文化財第3号
「延慶の板碑」



市指定文化財第19号
「文化九年検地図」